

よぬだ ところどころ



第十七号

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

深渡のハネ坂

今は忘れ去られた戦国期のハネ坂のお話

上記の地図は、美濃加茂市の昭和三十五年頃の一万分の一の地形図である。また、写真は右側に深渡川がみられ、河岸段丘面に上がる道が川沿いから斜め左にみられる。旧道は現在下米田駐在所の東の道を上り、墓地に続く道である。深渡から西脇の中屋敷に行くとき、昔はこの道を利用した。この段丘崖を登る道を「ハネ坂」と呼んでいる。このハネ坂には、戦国時代の以下のような伝承がある。

戦国期に福島の肥田玄蕃と毛利勘右衛門の争いがあった。古今東西を問わず、いずれの戦争にも大義名分が伴うことはよく知られている。勝者は敗者の問題点を示し、争いの責任を敗者に求めるのは常である。毛利方に記録がないので、歴史的には一方的に毛利の非となり、弁明の余地はない。それでは、肥田方が毛利の施政の非としてどのよ



うなものを挙げているかといえば、①毛利は暴君として知られ、領内の農民は大変難儀をしていたとする。その具体的な証拠として②婦女子を裸にし、西脇のハネザカに追い上げ、尻を火で炙るという極悪非道なふるまいをしたとしている。川辺の陣屋野に布陣した肥田勢は、毛利勢の内部崩壊により勝利した。当時の戦闘は、切った張ったの大立ち回りはなかったとされる。まず、調略(買収・寝返り等を促す)、威嚇(大人数の兵力をみせつけ、戦意をそぐ)、逃亡(戦闘にならぬよう退き口をつくる)兵糧(穀物等を刈り取る。また、焼き働きと称し、家屋等に火をかけて戦意をそぐ)つまり、干戈をむやみに交えるのは、戦いの上で愚策とされる。さらに、戦いに勝利した場合むやみな殺戮や収奪をせず、降伏した家臣団を利用し支配が継続するようにする場合が多い。そのため、敗者の罪状をおおげさに告知し、宣伝を徹底するのが常である。つまり、肥田勢が言う毛利の悪政が事実かといえそうともいえない。この後、肥田長寿丸が奪取した牛ヶ鼻城は、蜂屋の岸勘解由との話し合いにより馬串山城との交換が成立したのである。